

カツと雄一は子供心にも、母親の変化に屈辱を
覚えたが、胃袋が満たされる喜びに比べられる
ものではなかった。成長するに従い、その屈辱
感はずばかりでカツと雄一を悩ませた。が、他
に生き延びるべきがないことを知っているだけに、
母を哀れに思いこそすれ、責めることなどはでき
なかつた。

おかあはんの二の舞は嫌だ。何がなんでも貧しい
生活から抜け出さなければ、カツはその一念に燃
えて耐えた。

そんなことを続けた五日目、明け方近くに尿意を
もよおして立ち上がると、股間を伝わる生暖か
い血の感触を覚え、続いて下腹に激痛が走っ

その流産の後、カツは妊娠しない身体になつて
いた。激痛に耐えた値打ちはあつた、そう思つて
カツは喜んだ。身体にどんな悪影響があるのだ
ろうか、などと考えてもどうにもならぬことは、
微塵も考えはしない。

喉から手が出るほど欲しかった田畑と家も簡単
に手に入れた。戦争で二人の息子を失つた老
夫婦が、自分達だけでは何もできないので、全て
を売り払つてその金を持つて町にいる娘の所
に行くというのだ。家は古かつたが敷地は広く、
屋敷の前には菜園があり、田は、大せまちが三枚
もあつた。金額は莫大だつたが、老夫婦にしても
どうしても売らねばならぬ物だつたからだろう、

た。カツは布団の上につき座つた。脳裏に死の陰
がちらついたが、こうする以外に方法は無いと
確信するカツに、後悔の念はなかつた。結局、
カツの異変に気付いた清に医者に担ぎ込まれ、
「何てことをするんな、死んでしまふで」と、清
や医者や看護婦にまで説教されることになつた
が、決して、その行為は無駄ではなかつた。
運命の神様は、意外と気が弱いのもかもしれん、カ
ツは長い年月を経ることもなくそう思つて、微笑
むことができた。

強ひ執念で疾走するようなカツに合わせてくれ
たのは、清だけではなかつた。運命の神様まで
が、カツの思い通りになつたかのようにだつた。
物件に対したら格安といえる額だつた。カツは何
としても欲しかった。これだけの物がそうそうあ
るはずはない。カツは怖じける清を煽つて、集め
られるだけの金をかき集めると、それらを一括
にして手に入れた。

清は気が良いだけではなく、庭師の腕も良かつ
たので、仕事は多かつた。それに終戦後は、料亭
や旅館や医者の家だけではなく、民家でも庭を築
く家がぼちぼちではじめ、やがてそれがブームに
までなつた。近所の人を何人も雇つて、清は仕事
を捌いた。
一生背負うと思つていた莫大な借金は十年
もすると返せた。カツはすぐそれらを担保に新た

に借金をすると、ボロ家を立派な家に建て替えた。屋敷の真中には清が自慢の庭を築いた。ひとり身だった兄の雄一も働きの嫁を貰い、カツが家を立て替えるのに前後して家を建てた。埃を被った木の素麺箱の上に乗っていたおとつあんとおかあはんと弟の位牌が、仏間の仏壇に収まった。

「もう誰つちやに馬鹿にされへんぞ」良かったの、というように清が微笑んだ。

「へエ」とカツは微笑み返した。が、清のように、生活の地盤は一応できた、思えばしやにむに働いたもんや、四十歳にもなったことやし、ここからはのんびりやろうや、という気にはまだならな

し、それが子供の幸せに繋がるんや」と清は分かっていたような分からないことを言って派手な生活をして、今まで通りお金を貯えたいカツに協力しなくなった。

「ちよつと小遣いが使える身になったきに、旦那の気分かいな」氣候が良くなると、仕事を休んで近所の陽気な連中と旅行に行く清に、カツはそんな言葉を投げかけた。

「そななこと言わんどかあちゃんも行かんか。そなに年がら年中目え吊り上げとったらべっぴんが台無しやで。命の洗濯してこんか。生まれてきてよかったと思えるような生き方を二人で探さんか」と清はどこまでも人が良かったが、「フ

かった。三人の子供を町の大学にやり、人の上に立つ人間にせねば、とカツは思っていたのだ。そのためには、まだまだお金を貯めたかったのだが、「行きたいというなら行かせてやったらええけど、無理に行かすことはない。子供といえども性根が入ったら他人や、他人の人生を操ったらいかん。たとえ良かれと思う気持ちからでも。お前が子供を例えにしたいという気持ちは分かるが、幸せはやるものやない、自分で探さな捕まえられるのや。親があんまり子供の人生の前に出よったら、なまじ幸せを探す邪魔をする。お前はの、自分の人生だけ一生懸命生きて、自分の幸せを掴んだらええんじや。結局人はそうしか生きられん

ン！」とそんな清をカツは鼻であしらった。「こなな所で満足してどうする、もつと登らな、人を見下ろす所まで上がらな」カツは心の中でそう叫んでいた。

それからほどなくして、清はカツの待つ家に帰って来なくなった。山の裾にある旧家の、利口なんか阿呆なんかよう分からん、いつもニコニコ笑っている白豚のような後家の家に入り浸ったのだ。

「あんな男、欲しいんなら誰にでもくれてやるわ」カツが平静を装ってそう言い放っていると、やおら女がやってきた。そして、何もかもそちらさんに差し上げますので、と上品な薄紫のお

召しを着た女は、豊満な身体をおっとりとして動かし、カツに離婚届を突きつけた。

「へえへッ、よろしおます」カツは怒りに任せて署名捺印して、書類を女に突き返した。女はその書類を両手で受け取り押し戴くと、深々と頭を下げた。芝居がかった女の仕草をカツは憎悪した。それは、自分の知らない、お茶やお花や行儀作法を心得、心身共に豊かに暮らす者だけが放つ自信に満ちた空気に對してだったのか、柔らかな笑顔の奥に見え隠れする、激しい女の業對してだったのかは分からない。

カツは怒りに震える最中、野良仕事で日に焼け荒れている自分の手の醜さに気付いた。カツはそ

つとエプロンの中に、自分の手を忍ばせた。

清はまるで人事のように、煙草を燻らせながら庭を見やつている。

女はいんぎんに挨拶をすると、艶めかしく腰を振り振り出て行った。女の背中を茫然と見送っていたカツは、その背中が座敷から消えると、やにわに床の間の花瓶を掴み、痲癖を起こしたように清のしている庭の灯籠に打ちつけた。

「カツ！」

悲しげな目でカツを呼ぶ清を振り切るように、

カツは座敷を飛び出した。

それから三月も過ぎた頃、清はひよっこり帰つてきて、何も言わずにカツの署名捺印した

離婚届を破って、屑箱に捨てた。

「何をするんよ、大事な書類を」カツは怒りながらも、清との絆が断ち切られなかったことにホッとしている自分を感じた。が、それを素直に表現することなどはできず、ふてくされている。清は、カツを愛しながらも、カツの元では魂の安らぎを得られないからか、結局長居することなく帰っていった。

それからも事ある毎に、清はカツの家の敷居を跨いだ。子供が大学に入る時やら結婚が決まった時、まとまった金を持つてだ。

「寂しいか？」清は決まってそう言つて、カツを抱き寄せた。長い間の夫婦の慣れた性なのか、

それとも、恋うる本音が押さえ切れないからか、憎まれ口をききながらも、カツの身体はしごく当然のように清の腕の中に滑り込んだ。肌馴染んだ清の仕草は、余りに切ない。抱かれています間、中、カツは清を罵り続け、むせび泣いた。

(以上9月30日放送分)